

茶窗閒話

近松茂矩著
漆山天童寫

單

又

特別
イ 4
3159
B 13



茶窗閒話序

其鈞維絲以慰嘉賓之心何與乎投轄慰嘉賓
之心也主客之歡復深哉尾藩近松氏有此舉
則輯茶道之故事上自王公下以至于逸民舉
茶道有德之君子加之以畫圖成三卷名曰茶
窗閒話使雅域君子其歡有于目睫焉席上雜
談君子不為也近松氏舉使雅域君子免箱口
之不興投轄之興不淺也其勤復不夫也非茶
道之要宣惟在口舌令疎至于親鄙會于尊厚
結交威儀嚴格而重禮讓同而後和也是不其

其釣維絲以磨石廣之心平書成巧予之序屢以
鄙之冠其首高
享和發市之秋

史生官人二十位下木村安孫目藤為朝卡俊
篤撰



茶穂閑話 上一

尾藩 近松茂矩 輯

昔は茶會の席とて別も定めてけなく其席しし見合せ
て爐を切りて點し珠光の座敷なりは六畳敷なりしとぞ
但し炉の切所は何畳敷とも三所あり其傳とあがて切
るもやがて切ると道具置のじうふの地敷居へおしつけ
て切るとの三ツなり然るに武野紹鴎が四畳半の座敷を作
り初めて炉を下中と切りしより己來四畳半構とくし事
ありて其後千利休三疊大目構の座敷を造り初めて炉を

中よ上て切しより大目構の炉とりをなすなり其頃より
昔よりソレ傳へしよげを切ふげを切といふ詞は廢り果
て今に世にこそ昔かゝる事ありしといふ事を知りぬ
茶人多しとぞん

○慈照院殿通利具茶湯子好ませしめて真能師と
なす此市代より御式檀様定まり所作も改まり清茶會
の座敷ハ八畳鋪をて四方の山壁僧玉洞か自畫讀の八
景の八軸を掛け記を生せくし基子とて清茶湯ありし
とぞん

○千休利未と共阿りしなりし時初めて茶を飲さんとして

此語志表

かすり点

其頃左海を古丸宗匠と稱せし北向道珍を招請し
し其後道珍が心安き者を頼み之指南を受けしに其四節
が茶道甚ざりしやとて天下を驚かして但し此頃の茶湯
よく直さばある大茶入り茶をなすくともすくひ入水
て點し味ゆりえりす茶をかり入りてかすり点に
ふてふ入りバ一際がふりしとのいひと是
をあまりとり曉得て上達せしとなり

○利休料簡より其頃の茶湯二袋を一袋となし又茶入れ
袋の長緒を短くし出情鈴入情鈴などいふ緒の結む方
古法の秘傳なりしをも出情鈴とりて結む事を皆

改めつ但し茶入の袋はまちをりけし事利休が後妻宗
恩手利よて茶入の袋をみびし初めてまちを明し此女
はりのずきよくて短敬も昔は取手の穴をりしをまあ
けさせしとせん

○利休の盛阿弥がぬりし鞆のうらあ見かゝる事裁度試
るにうちやがせしとせんも違はざりし

○今の世の障泥の形も大昔の如し是は信長公障泥
を御好しとせんしとせんしとせんしとせんし利休
伺候せしうに此形もなすきたりてとせんしとせんし利休
りよとんと立入のよとせんしとせんしとせんしとせんし

なごのう市意の上いとて即座の紙形を切てとせんしとせんし
に出来たりと市意より其後の紙形是えぬほどに又
と切りと上げると切せられ前の形とゆくとせんしとせんし
一分も違はざりしとせんしとせんしとせんしとせんし
とゆ極めありしとせんしとせんしとせんしとせんし
休形といふもの多かりしとせんしとせんしとせんしとせんし
なりしとせんし

○昔茶釜は攝津國のありてとせんしとせんし
て鑄り茶釜あり雪舟の下繪を最上とす雪舟は石見國の人
なりしとせんしとせんしとせんしとせんしとせんし
治工清くしてとせんし

正かきものひしとく一説に大内家其頃威勢盛なり
し右芦屋の治工とよび雪舟をも招き其絵をかき鑄さ
すしともいふ杉梅竹の絵有り其子孫の代に大茶を犯
す罪人を釜煎ありし時其釜を鑄きりしより茶人
煎の釜釜を好まぬゆゑ今世に常の鋳釜をのこす鑄は渡世
すしなり

○天明釜は上野國佐野の天明の釜師が鑄しきなり天
猫とも書きぬ世に潤東釜ともいふ古き釜の名物の多く
ハ芦屋天明の釜なりとある

○利休時代の京師は信長と与次郎の釜の名人

信長
与次郎

乙御前
ふらん尻張

なり子孫の相續きんを京釜といふ利休の氣はハリと好
く鑄させしうまきとある

○乙御前ふらん尻張をいふも利休時代の名物の釜なり

○奈良鑲といふは奈良の鍛冶が鑄し鑲なりトクゲと

いふ者の作を善とせり五徳の蓋置又つるなど此作也

りといふ

○短檠の置所は定法ありし利休信長公へ答へ申され

しといふ

○秀吉公小田原陣中より利休菰山竹のすゞはて見事あるを
見出し是こそよき花筒なりと秀吉公へ申上りに左

四

あし截れどもありて故切りしに利休も是いと驚くほどに
わら出来しや一上しに存のわらの意も叶はずんが
市不快もな前へ投捨せむら水しは風竹よて尺八
を截しし上しに昔の大よ市意も叶し前竹よりみ
りしにせし中秘流りりが利休も存のわら怒りのあま
りに亦破すもこれ今井宗及ひもつたりありあ
るも後つぎ金を秘流すも年經も堺の信玄も宗無所持
せし宗無死後と國宗海屋宗不價百貫ももめて
宗も傳へしとあり

○もどめ秀吉公の投捨給り竹の前裁の石もありてひ

心算寺在表

竹の籠生
園城寺

き入し利休拾ひて少庵へもやげもす或時を床もかたを
を挿し又其水のしきもて墨のぬれけしを見こしと
しひ水は此漏るも合をれもさひし三井寺の縛のひも
まも思ひ寄せて園城寺と名づけ即ち同く園城寺と名
づけりし書付あり後金拾ももあり後金屋宗貞
も評もありしと宗の家原自仙八百兩ももち置し或時
屋敷の野村宗二京都に遊び歸りて自仙といとよさひ
りしと宗平の口切の流もは必し宗平も園城寺も
宗も知らぬが宗平のそとを宗平といひしと宗二
もそれぞうり又上京ありしに彼園城寺を出し口切

五

中より階作りの家土蔵などなく見ゆるりてびを
中のふも貴なる所何れおんゆりしと思ひし
ころ茶道の形合の心は金といふたし今も掛物
の名當のまゆのあつた瓢の花しけ又の青竹をとり用
ひる物うねは左の名あり茶ふり今世の樂院國境など
の茶碗を形合するのむもあつし作らるりに面白
がふしとてい却る不道化もあつる事多し又い
つもの同じ形合もあつしかぢも何れの機変こら
解をたれとらん

○利休うすまにせしは道具の葉の芥子ふもせし
やうに形合する功者ありといはけきとせん

○尾微齋し物ごとにはまきし事をもたせし
とては秋のまの葉をよ如雨のあつる紙の掛のよ
かへしめおとせしとせん

○昔は濃茶を一人一服つるに
とてまゝもに退座なりしと利休より吸茶は仕
しとせん

○京師真如寺の僧東陽坊といふあり茶道をよく
利休の弟子といひ尤佐助喜の名茶ありは掛物は
尊園親王の六文字名號を利休の好まむ紙表具し茶

真壺

一幅伊勢天目一ツまで一世の間炉を絶たせし或時嘉次公
の近世を禱し茶向をいり為茶をさすさす各りは吐
きき方よりいり為茶より間をす大服よりいり進
ずべきほどに吸茶よりいり水と茶をいりいり此作意
付る應しよりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
毛のいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
大服よりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

○文祿癸巳の歳泉界北町人納屋助右甚心なる者呂宋へ
あり真壺五十取ていり聖年七月廿日所の代官石田
何のいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

ネリ口

を献し右の壺より上院は入るいりいり利休よりいり其泉を
いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
の者よりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
召上りいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
真壺と稱しいりいりいり

○利休の茶よりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

○宗且のいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

公が日光上人の山院より移り相種の緑茗煙花暮雲間
とありて和茶を嗜むるなりと彼の明恵がてめて
梅尾の植る一とくは諸種の種を得てこころよくて
手製を付しそめよ

○白粉シロコは利休のいそめて今も用ひ休沙秘翁も
しつ三宅大椿記を書きて京師ありと云々梅を
かきとぞ宗旦のいそめて大ぶりをりて

○紹路の此もてい炉の廣は一尺五寸七分四方なりしとあ
り廣過ぎてせがしきとて紹路一尺四寸四方なりとあ
り今も其寸法に従ふとぞ

名水

○三齋利休同道とて何れも宗無の行へ茶湯の行きには始
め入り亭主出て茶を存せりて名水を利休は引あげ勝手へ入る間利休の棚をさぐりて炭を
を直しおきに宗無濡釜持出ても水とて炭を煮
しあはつ何れも釜をさぐりて客のさへ今も心に残り
て面白と三齋屢物終るなりと名水と云々ハ解井
柳の水・宇治の三井・信長殿下茶屋ありとあり
○織田右衛門頼長入道雲生寺後道八と云々名物多く持
し中顔輝の繪の達磨ありしが京師丸山へ関あり
し此自筆を積をりて

不定火をききし水の姿をなげしうき昔を達磨今に道八
此一軸今に丸山正阿弥が許る炭むと

紹興の法をて池田炭をそま直に極よ言子火をて茶
をのけしと利休了簡と池田炭をそま其の炭を用い
ば炭をすくもて座付の炭や対し炉井とてよまし
らずと池田炭をいし一上皮の外は白くなる炭に焼置
てけしせ二層焼の炭と必付に客前の炭を用ひ

○織田有樂或時人々會しそれをいし高山た近の茶の
ゆゑ大病ありて山に心も思ひふらふれも休みの
病ありて清ふみ炭をいし路次の邊にいし及ばず方と

あまののえんのもろく掃清め夢て掃除の極も

と世話をやく事ゆはまはつていさだしくそゆ清き事を
せよと教ふる道へ行ぬるをいしふらふい今めせも高山

類病多しとありて一層のぬれ人々必付て炭といひ
○宗旦或日炭を掘くとて庭よりと路次の掃除をいしけし
何の隅の炭の炭一ふらとていし

○極寒の比或茶をいしけしけしけし魚屋の茶碗とて茶
と扱水を入り茶をいしけし時茶碗二つと破りて盪水をいし

しげ亭主めうしや炭をて中免止と肩衣をいし雑巾
おぬぐひしけしけしけしけしけしけし

鑄をヒビキとい
つては御書に似
通つて面白か
名古屋のりし
をまわし
奥州者識

中達よりに町の京兆佐渡守牧野何りの茶道を好まれ
日利者よりおろしむれば先一晚さんありしが宗元持
ませしが一目忍ぶより先年江戸を物珍探幽
が許へ茶を引し時彼等の秘苑とて知しし桐倉がらんそ
時のそを引しと京の茶の取持するよりとらひし其取次の
者ありんとて京中珍茶ありしに一條の宗身とて小者
其取次なりしより中より即茶大の形寸法なども寫し
し花のつらとヤルをたよりとせむはるいし水しと紙を世
桐倉の由りしと宗元其價を尋ねしに代銀
三百貫目とせむとせしと中より即其方書細し探幽方

改名
都歸り

知らざれしとバ大よきびて弟子何のりに其價を尋ねて
美上し牧野侯のや世話とて再び探幽方へ交りし候
侯より都歸りとし山名を賜ふとせしり其後侯江戸へ下向
し探幽の探幽伺候しに厚く禮を述べて一思冊とい何と
てし中探幽の給ありしは仕ふまつりしと上しと段中ハ
まはさしと不二山を十幅對の畫とせしありしは昔ハ
未だも例もなかりきとて十品と圖し得べきとてたどる
らざしと探幽の探幽たなりぬとせしと不功者なりと云ふ
又其方書いしと給あり候もむらびとてとてとて古の名人ハ
易く画得てし事とせしとせしとせしと探幽輕く目子等ぞと

富士、四十
幅對

中山の茶

思ひめぐりてきて、
くわいばい、
とらふれ、
やぶて十幅封幅、
今も牧野家、

○龍川た近將監一益、
三種あり、
あり此内中山の茶、

なかり、
事の、
りは、
幸尾、
何と、
し、
依、
庵、
出、
使、

黒木の掛物

家の者どもは黄金納め置き人事いづと云ふに我若
かゞふ趣向ありとて厚く謝して即ち黄金を以て
北野の一寺を建立して祖先一家の菩提所とせしめし
其黒木の掛物津田平を奉つて代まで持付たり或は
及びて中興ありとて山堀遠州を奉りて中興と
得ぬはしとて今にても中興ありとて或人謂く奉
尾黄金を文にあり其金に二異ある趣向をなく己の
家の菩提とせしむるを奉りて寺を建立せしむるを
不風雅の事とせしむるを思ふべしとて佛をこの世に
具思ふものなりとて其心正しかりとるものなり心正し

かゞふものいふが為なりと衆と共に樂しむ事ありとて
衆と樂しむる能風雅の旨を得たりとて世に幸へば
ことごとく愚俗多くして眞の風雅を樂む人少し悲夫
○あまやんこととれを君侯の茶湯を好まむとて岡部
道加とて三年が間伏水八道とて遠州を奉りて
なりとせしむるを以て道加九十七とて長命とて加賀大聖
寺の地下にありとて常の徳りとて遠州を奉りて茶
道のたゞなりとて茶とて和の道具の最合せたりとて
りしと客より其具を請出す時を茶入茶拍袋等あり
もかき何れよく出せしむるとて投出せしむるなりとて

の外悪きつと伊さしれ志

○信長公の秘蔵なるし姥口より釜河を柴田修理亮勝家越前國を拜領せしむ一後安土へ上り御禮を罷出されしより公手ばらり茶をとりお首がら上意ども何の折りしに勝家之命を召し置り一姥口の御釜下し賜らば昔は老後の思ひ出されし過さるるごとく上りうば公の前は御禮一時大功を立てたなりあつたは作らるるしを忘れ給えんは安徳越を平治し功を思はれしよりわやうあがけし奥へ入るる給ひてり自身よりの釜を提げ給ひて

なれとありぬるの姥口とくしとせし事
しうごうありふとやは難あつた直と下されし事

○懶齋先生曰茶禮其本遊人逸士の幽趣を以て清虚閑淡を能く其會を水に數言とくし是に富貴の相なきふとくし然るに義政公てまじ茶道を脱し給ひてかり閑ろく奢靡を流し一土器の尺璧より貴く一軸千金の重なりし即ち茶道の流弊なりしなりし然りとせしは神の在り於て尚觀るべき所ありしに會席に臨みしは主客共負佐並に沐浴し服を之押しとくし文を改め教て妄言動せむ虚しきと執せども盛らるる空へ入るるも在

あかくす敬いあずや期り先て来り期り後まで又来り
す周旋起み進退消息尽く法ありと事ありし禮あり
らすやも室に寄せとてどし画うる鏡めずも饅い玉度と
しとも肉菜三四品は過ぎを倫ありあずや而して和の其間
は行も梗概ありて観るべきありあずやとてむる水
の其末弊あり茶人らんが其不復をも事と思ふ
るやとて

○紹鴎が四畝半の一間床なり道安四尺三寸ありちり宛り床
を休師見こき一段りとしてる返りて建し時より四
尺三寸の床となせりる今も多ういふ水隨りてり

笠
平蜘蛛

○杉の深正久為及逆しと大和國信貴の地と云ふ
忠仰し改弦めり水已り後時と及びる天守より其
秘蔵する所の平蜘蛛とて釜をお破りしと投後し微塵
より碎きし火をとりて自害せり此釜は平蜘蛛附あり
しとてたゞいふと云ひてさうりては遠くもあかく見えて
ゆえに名物なりしは釜信長は深く珍しきゆゑ死
後よりあやうきとて人事を嫌ひしとて思ひけん

○信長の御茶具の内より櫛柴の肩衝七御前の釜・餅
春の水・虚堂の墨・祿等々天下の名物あり明智光
友逆し安土の地へ入りてその名物并し不動國行がた

信長、道具

刀・二字國俊の刀・藥研藤四郎等の脇差おいたく坂本の城へ
明智左馬之介持行し其の龍岬已に今日を限りと成し左
馬之介其の妻女弟の兄弟の子どもを天守の上へ焼草を
なく扱右の道具どもを唐紙のよきた裏に女の文を帯
に結ぶ天守の武者はしつと持出て大音あけしは寄
手も鳴を結めてつしつと寄手の人へしつと主君日向
守運命はつと討死仕しつと其妻子をかくはす明智
左馬之介其後只今自害仕しと臨みて了簡作し我こそ
滅亡仕しといふぞ天守の名器をば毛ほゆるんつと念
ひ目録お添へ後進し程大將の陣中へ進上致

しきまけりしつとつと即ちの紳をさるるしつとおろし
く水戸宮守の者どもを所旗下一進をとんとけ立入
て妻子を刺殺し焼草を火をけ天守半焼上り射左馬
之介腹十文字をかきつてやけしつとつと松永が平城を破
却しつとつと重泥の事をつと救う傷つたのつとつと士をりせ
数千の家子稱歎しつと涙をおとさるるはつとつと
○障子の紙はつとつとあ一分の細く一分半のつとつと利休居
士やつとつと
○休師の曼珠沙花と鶏頭花のつとつとあつとつとつとつと
今のつとつとつと牡丹のつとつとあつとつとつとつとつとつと
十五

芙蓉と紫のほろろのうしろをすれし得て若菜の葉を
け牡丹の葉をすれぬのうしろ又尾の尾を休師面白がり
てなす生けりし一或宗匠の家の木蓮花好む生けりし
一名は紫玉蘭とて昔の世に希なりけし豊國廟前にお
もしを花の此より所望する人多かりしと云ふ
○籠の花生おぬるまぬ物をむすりし為板に載きしを
七人の高弟の中なる某為板に置きしを休師見古
來為板の旨くとも面白かりしと云ふ我おも弟子の
らんとしてそより為板を用ひしと云ふ

○釜の大銀の三齋の創意を鑄せしと云ふ今一尾

流し用ふなごししに僻事と伊織なること云ふ

○室所家の同朋中尾相阿弥の末の淨阿弥と云ふあり表
具の事を詳しく知りし巧なりしが連歌を好む其師紹

中尾 紹弥(表具也)

巴より紹の字を譲りしに淨阿弥の阿の字を賜して紹
弥とありしと云ふ佛光寺通鳥丸と云ふ所を三百中
も姓未だなき家より教代任たりし今も中尾紹弥とて表具
師なり代々の傳書ありしと云ふ道は重て物しく故實を知
りしと云ふ

○去方より一尾伊織の甥の行一尾作の茶杓を所望しし状を
或人持り

上林竹屋

○山崎遠州侯伏見より西へ此北前守里田某帰國の次
年立寄山崎人間中茶屋より山崎と道中より中越まで
此は其用意ありけるに何の儀にせりあると大津の驛に
て養生せらるるに當りて當日の茶會にありて使者を立
派し上林竹屋も其意なき思ふれりより上林竹屋亦
其奇者兩人を携へ見舞の上りけり幸今日は催さる
侍りの次次ハもさるるに茶もあまなしとありけり
人其のさるるに有るに波りたり頃ハ六月も下あつ
ふ夕立の雨をかく中立ちぬるはなかりし不晴
ふの雨にいと涼しくありけりかくて茶肉はほびて
ふりけり

上林竹屋

西施が聲

花やま林の壁よりと水打るるにさるるにさるるに
各々のことありしにふへ候はぬひてけりぬ夕立
のぬれにふちと涼きを思ふに目もいとゆるるに
も當敷ありぬると生けぬるなりと作らるるに
人其と感じて人にも知りぬるに京中の生茶人
とて傳はれ林を流るるに花のけりけりけり
へゆき流るるに大に笑ふにけり上すて宗匠の作意を
一概に心付くことありしに似たりとてなりしに西
施の嘖と働ふ類なるなりし
○休師の手まにいさも目につたなく魚肝もしありしに

三十一

うみひがしん見とひる事ぬくすらむ
しや凡品を離れ妙境がらん針屋宗真常
よかや

○當時宗匠の内より山姥遠州彦宗甫のま前何の律發
も味もななく上すらくともそのなりけり休師の後を妙
くくと天下よりてそやき一に善くも地位よきれし
かやらん

○休師在世のほど休師の系する道具のりありをの
こひて茶道に左後の方ありけり休師の客は肩
衝を用ひ左海のおのり茶を用ひけり天正の末より

肩衝ト来ス
用ニカケ

左海の方よりとて休師よりとありけり

○釜の鑪子一物一名なりありけり述きりゆき知らぬ
人多く太平記の鑪の九輪をわろと鑪子と鑪とを
事いひりし事ありけり

○因幡守牧野何なり風爐の會に初産の花を生けり
此の心易き友初産の花をいひて問に其の答は
吉望子といふなり掛物花を生けり此の水を界
て兩産も分て家の持参の花を又以後もていひつるに
らんといひり初産は生るらんかむ初産
の花を初産も初産とせんらん

○利休の朝顔の侍など古流はつれづれ侍授うきり
 一年利休の露地は朝顔をさくさくしつゝ花の比見す
 なるより秀吉公の御代はつれづれ明朝御覽あら
 くと即ちなまらぬしゝ露地は朝顔一輪をれく
 いと不興と思召りつゝ山彦あへゆ又あはれ其色あ
 らぬぞ朝一輪をれくさけつゝこころに泣くそをい
 ち相傳の西よりて目をさしつゝ地と甚ど中極
 其の事とせしむる利休が朝顔の茶湯とらひ侍ふ事
 實なりし事を知らず

○入贅とらひ者京都の巨匠とて数寄道の逸人也

けり異様なるものなほとて整師古道三と無二の友なり
 一或時道三考へてへ千貫の字を桓とせしめ其改
 桓の字は木篇の傍に一旦と書けり傍の上の一を取
 木篇の中へ入れば本の字なりあり其本の字を且
 のふの中へ入れば三の字なりあり日本一とらひ
 字なりノの字に人の字のはちなり然るにへちるん
 は入半分の日本一とらひ意ありとらひは桓は異風の作
 意に根元得道の上よりなり黒しと異ならん今
 世あても規範となすもの多し美茶壺の者なり
 中へ入れば或時ノ貫ぶらむ口へ入れば事なり

まありし山料山料は信み此に常り手取手取の釜釜下りて朝毎
に粉粉といふものを煮て食し終りて砂砂を磨き山下の
清流を汲きて炉上炉上に煮て茶をたのふは一首の狂
歌をよみて

手取手取めよりの水は口がさしぬらうぬらう増水増水とくも人よか
むれ或附休或附休日比は及びそのおりにび尋ね
とて二三子を携へて携へて河をひらぐ家の外面外面に石井石井を
直ちに街道街道まで入馬の塵埃塵埃立立こみていふさあき一紙
見ては水も茶いのもいふ各帰らんといひしをノ櫃
みすはち表へ出て呼びてし茶の水は筈かまより取ふがそ

水でもち帰り有るを高き山へ呼ばしは依河依河の水か
らばとて入るともなひ立りり急知の如く親しく語りて
それより交浮交浮ありとて人

○下京下京は福河原とて貧しき者ありありあはれ茶
のこたのびくも或茶の茶旦茶旦

煤煤をすすりすすり門門おとそんおとそん餅餅はつすわつるつる春春は
素素もけさ此歌の作者はごのなるん是此福河原が
よめりば其人の風流ありあはれ堪へりかゝるかゝる逸人
の多く後代後代に夢夢をさるるいふは

茶禮間話 中

近代茶事は、大徳寺の僧どもも墨蹟をうけて面白から
ざといふ甚きい小座あり他の墨蹟は掛られども禪家の
こととて、此俗習は、當時の茶人皆文盲なるものなり
僧と尊と僧徒とをへて慧黠とて人を誣ひて己が道
へ引入る才あるものな茶味と禪味と吸書と松風不
意庵など、附会をとりて茶道の意趣の専ら禪機
を存しもの心得るるに、僻事なるといふれば、かく禪僧
の墨蹟をたゞ事、教意その祖たる珠光の二休弟子
を、紹鷗の二休の弟子利休の古溪の冬、宗具の春、屋

茶事生表

のり子某の居士となり遠州彦佐久間得監なりは江月
の弟子と仰ぎし其の宗匠を嘖々傲びて皆参禅して各
其尊信を以て師の徳を尊信を尊信と仰ぎし其後人そ
を以て茶席の由事ら福家の墨法を以て用ひし概
なり古代の和漢の名筆書画とも用ひし概一
心得のいふすつて禅僧の手法に習ひなくむに其氣
象をあらわすなごのしきと書けるか多ふ世態なる
悪節見ると堪へざるものにて其徳も不風雅とあり
事どもも子偈と稱して愚者に似せざるをばあはれ
吠ゆる輩直を責うするより自ら賤しむるを責めて世下

賞観するにけいりうぐや強ちの賈なきとて賞す
まそのけい清風明月一錢の賈を用ひすと古人を
以て何物の名器か明月は此の賞観も及ぶべし心
あらん人其の心をゆるひてあはれ風神の真致思ひ
半ばの過ぐるなご

○四合の信人より依師へ金を兩送りて何をもてこれ
茶湯道具求め給ふ水もたのまきこえり休河其金
子も茶巾布をよのけりをもつとて信は何なくて
そありなんし茶巾は清らなる茶の飲す
のうらひはけのつさけ

新らき茶

瓢花生
顔回

一節切
尺八切

○高貴の人へ御茶奉るは新天目新茶碗を用ふべし
或字匠を以てしん

○風炉先屏風の四疊坐已上の座敷に絹鴨子の座敷
之上下黒縁をけく共二尺六寸分り共々之其天目可外一
見えぬ有り但し利休の座敷より甚高子の高さ一寸五分をきく
なれは分りしけ短きならんといひ

○瓢の花生はけしけど先順禮のもの、水筒とすし之腰
よりけし通りしを休明途中とて之付所望して花生
と一節回と銘を以てせ人々之の花生を好むといひ
○一節切を以て切るを一節切、二節切を以て切るを尺八切

とすし二節切は休明花のまじりぎめを以て好まうか
を或時與之衆とてまじりしは衆一掛しを以て今も間
おる用ふしはながぬまじりし

○瀬戸の茶入は外邦まで焼く所の茶入はつゆの
名物とて益立ふかぬといふ人ありしは休明も瀬戸此
肩衝を二両度と益立ふかぬといふ事ありしは昔より
ぬまじりし其人よりおぬの茶入は今焼くも益立ふす
てしん一概しぬまじりし

○或日宗旦焼くはけし利休偶或山致とて雨又逢ふ
しと所は打落しぬまじりの出でしを以て面白く思ひ

露地、砂礫

御製

はつと心やとまづけらるはのよし月のふりなるはら

あま

内海茶入

○内海の茶入の昔の其のまじりたるはたれとてはたれあへぬす

例はるる名物の茄子の肩衝は必ず内海を挽ぬ

の用とつづき漆置きしは休師の簡とて焼物とやき物と

さほはあやふしとて漆物の面取は内海を可ひとれ

しとまふのせよとて漆入とてしやれ

湯桶茶入

○左海薬師院の湯桶の茶入とて名物あり後、赤井何

がせきや一峰のよき口のよし提げるとにたりと何と

盆

蓋はも桶のふきのめくし合せ目を切連へてはくもなす二枚の
割ぶるるるるるるるる

塗師鴨林

法界門

羽田

内赤(盆)

頼川東房

張成

○盆は唐物を用ひしものありしを盆とて稱するがよ本
邦とて塗らるるしなる鴨林とて塗師とてなり京都妙
覺寺の前法界門の住持なりな彼らのよきしを法界門とての
後大内家と招ひしを因防の山口とてなり又羽田と
しよとてしよとて其の大海の門前とて住持なりとれん

○内赤といふ名物の盆は唐物とて頼川東房とて朱とて書

付あり又張成造と針の先とて彫付し様よき付あり昔

は盆七枚ありありしは今は在所の知水とて織田有樂

天目

二枚所持ありしが一枚、堂上方へおくらし一枚、織田三五郎へ譲るし一枚、侯家より何れ一枚、系紳本願寺の家件なり。何れしが家より何れなり。

○天目の大概、灰あづき、耀變、油滴、黄天目、只天目、白天目、紙皮益、建益、黄天目、白天目、白天目、黄天目

天目甚七ツ甚

○天目甚七ツ甚、名物唐もの外り是、京師東山建仁寺の寺中、禪五庵より、什物の天目甚十ありしを三ツ紛失し七ツ残りあり、箱中比能阿弥、尺出、名物となり、数々甚とあり一從は了、於

粉の甚

左の甚

蟬の甚

茶筌置茶碗志野

鏡茶碗

○其ともふ、尾崎甚とも、粉の甚、は、名物とて、當院より、其の、攝、尾崎へ、唐船来り、何甚十、流し、その内あり、寸法、數の甚、ま、黒塗、朱、も、て、蟬、を、一寸、五分、八厘、一ツ、畫、て、あり、おむ、の、甚、とも、い、の、甚、

○茶筌置の茶碗、志野、と、名物、何れ、是、白磁の、白、藥、の、こ、り、こ、ま、か、れ、る、裂、文、あり、茶碗、の、耳、を、五、葉、の、花、形、に、ま、が、さ、け、る、もの、なり、今、い、づ、れ、も、有、や、し、知、ら、れ、

茶杓ノ名目

三所持後、織田有樂へ付けり三五郎儀らゆり、
○茶杓の名所 先のこのを露とす、さるりを双先といふ茶とす、
真中より筋落しとれ、桶のある、
節 柄の留 ふうりて、又平の茶杓もあり、柄
のどつれ、筋のあり、
○茶杓の作者 守徳 東山庵 時代 羽淵 守徳 羽淵 時代 塩瀬 羽淵 時代 此三人は南都の住人あり、宗清も此も南都とて、紹臨の此の

茶杓作者

七ノ蓋置

花生 達磨

者あるが、
慶首座場南宗寺の僧にて、利休同時、茶道も名あり、茶杓
上手なり、石川六右衛門尾州も作り、茶杓を削る事上手
なり
○近代七の蓋置とす、三ツ葉、解虫、さぐり、寢屋
番煙、三人坊主、五徳、輪、是等とす、
○宗旦の作も瓢箪の花生、何と達磨と銘し、
ひやりらん、の達磨なる、
種もなり

筒井茶碗

信長公或付より肩衝をゆづつぬありに利休も天正
寺屋の及と不和なるも宗及方より肩衝何れ由
中上より即ち茶入市買上ありて過分の黄金たれ
しむ宗及樽肴者茶事など思ひ利休へおくり侍りに
利休も使者ありては友は尋り茶も依怙いなりぬ
より亦あつてつりさし日取不和おしていさむ事ある
べり然る上此音物又さす道理はならずとて
しむとさす

○秀吉公序終焉の井戸茶碗ありし中迄考の人より
為し五ツのあししはたのりなりや機掃ありか

折角幽齋法下居合さす

筒井ついつつとけけ井戸茶碗といふはあれが
さしつりしと吟じられしは甚や感さしりし筒
井茶碗と稱せられしなり

○元龜年中正親所上皇勅より利休茶具一通を献
せられし

御茶入つめ大小二の黒塗ふの上より大の方には陽の茶
小は陰の桐のとき金粉をくすね給りありしなり
巾着杯の象牙水壺杯の曲物
香合の蛤の殻を内外とも金泥上下とも甲の上より白

の大菊と胡粉を置きよす

炭斗の檜の割日本地のふち高きうしろの大菊は

極彩色とておもしろ

花ハニ重切の竹花入り皮の表ぼりせと、けく

切口うちらへん厚強らん真の黒塗よりて青海波

を漆の上より一重あき繪をぬきぬきお茶の如し

右睿覽よりそまへり水はたよ赤白の叶ひ黄とて居

士號を賜りぬ

○宇治の通園う辞せよ

一服一味一期中

最期一念雲脚淡

行先も又行さるるまでと心持の系きぬ元の本の

印水 是を一紙よ書きしを東沙能指師池西言水ふと

買出大徳寺真珠庵宗賢へ見よに暫く存一扱

珍奇れものぶき、貴物とて別ふしやほりぬ物なりと

たあへばほりまほりにぬれ我をぞめて見しが是に通

園がま跡ならん紙がて付代まも同じ決して通園の

真草の折笥金ありやあね林のかけの雪舟の横物

がわいぬれとせん其の後爰三右のほりぬれしや

やうぞうし程よきそりて持行ぬへい言るる三

太へ言ぶしとありしを言水更又言とてん度

市院ありし多録も何ん興^{きよ}了る事をも笑ひに
中座興うあぐん眞實何の掛物とわん程もさぶ
しとせと有りし言水大も驚きうわら左
らうバヤ持けんとして持帰る三石内門宅へ寄るこれ
をんち一に一目見て是いひてして持参さうや先以
眞珠菴も見て所望さ一軸なうらそ方より入り
しや是非さうわらとてばなう程や望の由宗賢市世
とそ外遣るすれ責公へ進ぎよとせ物も給りし
故直り持参さうとて三石内門甚ぞ恨む置して行
くはと百兩遣りしんるわらもけ程あり道具大

利休茶室
の文

金子如き一お是とてかんらんをよとて八十兩渡りぬ言
水に常に道具の取扱も茶もすき一は此通園の草
と大燈のわらもの二種も生涯の垢せしなる一通圓
の手に天巾の珍物とて彼の宗賢の茶會^{ちあひ}ごにわら一
軸今も眞珠庵よりありとぞ

○利休自筆の文の茶の茶の文とて名高き何や其辞よ
定家の小色紙りもよと給りし言昔所ん似合るや
茶の茶もさなる茶をわら子人の持りてておし
○利休娘おさし百代屋へ嫁しそ子を有て後若後
家となす一が天正十八年の春世伴給りなうら一は

秀吉公諸大名の方へ申成りも繁く申茶の湯申能等々
折こあり又申鶴野も毎こ申出ありし孫生やまひの初め
つゝ東山道とうざんみち一山鷹將やぶしやう申出され南禅寺なんぜんじの前より
黒谷邊へくろやま申出され申路小申供こけ申付佐さ之の法ほ路ろ守しゆ前まへ波なみ
半入はんいり木下きのした半介はんけ其外申小姓せうしやう三人さんにん并ならまり申身申鶴
をすゑる水山陰の細道を過ぎ給ふ所ところ向むかひの方より女
一人ひとにん女にん三人さんにん申出でつつ水みづ乗物のりものを後のちよりより破籠やぶかごやの物
阿あややしし地ぢ下げ部ぶをを存ぞんじじをを山やまのの道みちのの梢すゑをを申まりり申まりり
と静しずかかふふ孫まごをを申まりり出で来き申まりり木下きのした半介はんけ申出でへ
立ちたちちてて扇あふぎをを申まりり上うへ様さまのの申まりり成なりり申まりり笠帽かさぼうし子こをを申まりりぬぬげ

ととよび供の僕おこの飛と鳥とをを田のり中ちゆうへへすするる頭あたまをを地ぢへへ申まりりぬぬ彼
の女房にようぼうののちち驚おどききをを申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
とと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
陰かげのの立たちち寄よりり申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
あありり申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
漂うら子このの糸いと糸いとののちちららしし縷いとをを着かけけ申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
長ながきき申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
ががらら面おもてをを申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
ししてて花はなもも及およびびぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ
とと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬとと申まりりぬぬ

漂論談

天童評
切角の茶道
要語の書爰
よらりて小説
作らり

をこそいひのり者ぞとゆゑぬ有りしに千利体おむすめ
万代屋の娘を侍りし徳の女中とけりし内
美女とめえしに事いひて官女もかゝる姿いひ
いと侍をいひけるおつて艶書をたのむれしゆかに
聚樂へめまひしをもいひしや上けるお夫と別を悲だ
の涙あてまゝもいひまゝもいひしやゆゆしあり
とてゆゑしにきざりしはなにもいひしにむづしめ
まゆ内とて富田左近を侍りし父利体は聚樂へゆ
つゝいひしと頼りし侍ありしをも利体も娘が操を立
志を彼らもいひし其上娘を妻とせし身とて五人車

まくらをしく思ひて遂に中清とさざりしはまづも義理
の筋に破らぬずありしおふゆゑの思ひより内は深く
憤りありしをゆゑに折節大徳寺の山門を再興し
棟札をおち我木像をあけし事など世にわかれゆく
耳に達ししに不届きしものとむづしめす所は安臣
ごも便りしと見すまゝ近年道具の目利は私曲
なりしとむづし或は賄賂をまけしゆゑなりしをゆゑ
なごし行ふありしは後言ふ事ありしは前とむづし
市愈儀もありしは少石直とて事なかりしは風きとも内
而不快のまゝなりしは終に刑せられしは徳大徳寺

の山門に連歌師宗長が建立せしむる一くして傾破せ
 を利休家富より一かき檀越宗陳と相議し古溪和
 尚一して再興棟札打木像を作らむはぶ桐の紋の小袖
 其上より八徳を着せ角頭巾を右へ下げさせ尻切をとり
 杖をつき立て遠きものぞめる新より樓上りあげ置し

京都紫野大徳寺

山門利休三像

此の草履

別荘よりもの

ちりき

近衛家の縁ががキ

かり福もむすし輪

畫のうらと形いふ

似ぎ、ちりと俗なる意歌を懸浮けしは、中女まきとのうらむ

殊とりのとも伏し目からの形なり



後日何のやうなるのありしうとも宗陳一人して其罪を引
 けりか大徳寺別荘のつらきしとあり

○利休がやがの唐間の大徳寺塔頭高相院の茶室のあり
 表門の同寺中龍芝院の門のあり其所門の日蓮宗の妙蓮
 寺へ引く建しとあり

○利休より細川三斎の何れ院の釜鉾の茶碗
 石燈籠をとりしとあり三斎は生准右の釜茶碗を一日も
 見給はずといふのあり茶事しむるに石燈籠を
 居間の庭にすゑし置きて他國旅行しむるに泊
 るにすゑて火をとりしとあり是れ朝と暮道役より持ゆ

鉄ひし
 尤も茶碗
 石燈籠

金 何ぞいふもの

利休七高弟

て昼休の間に先一持のりきまり一著きぬうちと場を見立
てす急おききもせしが没後には大徳寺中高相院へ宮
附し自分の石塔とせしめり又阿弥陀佛の筆を長岡休
夢に譲らせしがその阿弥陀佛中が地獄へ落ちし

○利休弟子のうち七高弟といふは

織田有樂

源五郎信益

蒲生飛騨守

氏編

細川三斎

戴中守忠典

瀨田掃部次

正忠

芝山監物

高山右近

一從の有樂を除き佐久間不干を加ふ又一從の有樂と
不干と除きて有馬玄蕃をかへし

編 編 欣

○昔利休ははまごの古流の誰が残りみまはり中へと津田宗
吸へ今井宗久などは肩を並べて宗匠より一か千家の系
図に載せられざる高名の茶人ありありといつそのほご
や古流は微こるりてあはれも世まごの如くして千家のこ
さうしりなるも今の世に 三斎 古織 有樂 遠州
一尾 舟越 佐久間 多賀 金森 片桐 眞置 宗編
なごの流と各別のやうに一派を立ぬども其根を皆千
家より出でざるか 千家は茶道の大宗匠とて
○太平記に依る本道譽ら七夕の會に七所をとりて
七番茶以袖へ七百粒の裸物を伝へ七十服の本非の茶

梅の尾の茶
を本(真)と
す

回茶貢茶

茶初茶伎

を飲ぶべきなりと宰相中将殿を招請しけりとい
ふは十種香ありと付て梅の尾茶かと他の園の
茶を非と量てて其をまじりて煮て出し飲分ち本は
本、非の非とありて記ふ志る一勝負を争ひのこゝあて
しやひまのを取事なりとあり

○僧行譽が曰、十服茶記録其中、回茶貢茶とあり
事、回者聞一而知十賜者聞一而知二との語は
づきて名づけしあり是本非といふ茶の勝負を感
ふありと後人の作意ありて茶道の本或とあり
とて宗旦いふは茶歌衆伎と異名と用ひられ

ざやし

肩衝
雪山

○堀の雪山とく名物の肩衝を不持き者あり利休
をあらよして其茶入と出とをきて一利休一向の氣
入らざる所は帰しありと今この世も利休のほめ
たるの面白がずとて五徳の投はる打破しとて
て短氣をとりて同様の人々もひて帰らばつ
らけがて茶會を催し利休を待たせしを以て
まば利休見て是日なりと雪山をすずやせと
そんごのめきとて此のめき梅の尾茶といふ由と云
ていづぢかのまじりては其後かゞ廻りて或

ひらきし之類の美は凡そ其萬事兩なりしを京極差甚
かきしとて好むて或時遠州産の人もあつてはつぎ自
所に分はずして見ざるは改めたるを人事い
と問をいひ遠州産の肩衝のはぎあのか合ざるを見
とらりて利休も面白しと稱美するは名産
ふゆとあがりていひなきをたまふは名物をいひしるは
さしを近代も茶碗の破れしをつぎても用ひし
茶の破れしは勿論せずしるはもはくらくらひて
交して用ひぬるはさしをいひぬるは取捨あはれ
名物名物などは破れしをつぎても用ひしるは

保壽堂表

くやあまが

○休師の袖の色づくを包てふちまひを催し宗旦は櫛の
若葉の吹風炉の茶湯りしをいひぬるは

○休師の此の茶會は大方一汁三菜酒三献より肴一種な
りし

○水門の拾石はも目をおさるるをころころと助め入せて
くわらりと拾せて外にせし杖まきし直さぬ
ありし巧くてをなせし拾石ありしは休師のいひぬるは

○織田貞置武方行きしころかむの前は年ふり
大木のおもひ今をころころと拾ひきて貞置りのむ

水さし
芋がら

て焼き入りしとあり

○芋頭の水。いふに形は芋の如し。似たる故に
いふに南蠻の焼物。其の當時の喜ぶ希うして宗及利
休の之をいふ所持さるる宗及利休所持の秀吉公
へ召上られ。秀頼公滅亡の附焼失せし利休所持の織
田有樂の所。あやを極度習す。す。所望あり。と
ゆべり。文。わら。返。徳。太。刀。馬。代。黄。金。十。枚。お。く。と。ぬ
と。し。

樂焼
朝次郎

○朝鮮國より陶器を造る人。多朝して茶碗類を造ら
せり。是樂焼の元祖也。本國の工を稱する朝次郎と名

樂焼
名物

附。とも。の。せ。を。作。る。名。物。と。な。り。し。

東陽坊黒。即ち東陽坊が所持する金七百兩の價に
て望し。く。あ。り。し。と。も。あ。り。し。と。い。ふ。今

大坂の鴻池何のし。と。い。ふ。所。人。の。持。す。と。い。ふ。

齋。黒。織。田。正。徳。守。の。持。す。と。い。ふ。

本。ま。る。と。い。ふ。西。國。方。或。は。後。彦。の。持。す。と。い。ふ。

檢。校。亦。或。は。利。休。人。と。共。に。朝。次。郎。が。茶。碗。を。撰。む。

取。り。し。あ。り。し。と。も。あ。り。し。と。い。ふ。能。率。統。を。

撰。強。の。り。各。に。換。校。敵。も。打。笑。し。う。り。と。名。あり。

近代東洋の町人薩摩屋何のし。所持とありし。

もや舟 赤 大黒 黒 小黒 黒 水と七ツ茶碗と
とり今焼おやう此形をうへし此外所謂名物と
いふは

鉢部 細川家所持 あやめ まごゆ 再来
湖居 一文字 枇杷坊 太郎坊 ぬれ鳥

○棚がざりは名物二種出するいさぬ事とぞ

○利休の金輪寺といふ小寺の類の形のりー物あり

蔭繪は春日山袋の紺地の古金襴あり 後醍醐天皇

勅作といふ芳野の吉水院といふ又左海といふ所を

かひを前持するもの多し名真物ありて用る所も

素
金輪寺
棚がざり

松皮盆に載す事故實ありと或記に云えざるも其
形は横し桑又ハ花欄とて海塗等して用事と
なり

茶室問話 下

三齋公の萬の物ずき人の膝を踏む分て靴形越中流として今も猶し用ひるは是に當初の越中流あらざらば利体流に其子細一日利体三齋公の許しては物法はくはら水よりふし中好の靴出来しとして中流より水に利体見ては前道具を一立寄りて中流の形より内も是にあらしき形もや氣付し靴ゆはたの取置はし此中靴形もさかたにむらばざる様ななりといひはば公の言はるは靴形已に越中流として其こそはやすきといふたはしきもさかたに思ふも靴形

流石に利体之管弦を其身者の面白ういふは一雙眼ありといふは天童殿

心より早く是もさかたにやと取せし時す。中好の形より大よあさりいふは即ち我好をやとて此形を用ふべしと政め作らしめ給ひり此事三宅七半へ公而話さし三宅時山は靴を一本出さして是も利体が好この柄に或時我が山柄を見て是に誰が彫しとて改袷乗が管弦の柄とて名物なりと答へけり此は小身者の面白の心事を中好身者といひ似合ふは中好の角をかきかきいひゆゑ左あらば然るくはしきとせ給はれといひはばさなは来しとて中好に今も秘形すかりとしてさかたに西面もまた南録もまた地柄とす

香炉
田子浦

このに似てて様様よく恰合おと解かりしを後
日七年中より此凶年の香の事とせりかりし其香
の茶湯は利休直傳を三齋より授りたり凶年此上
藤村庸軒へ傳へ師一田子浦より香炉を譲りて印
證とせりと云ふ

○利休が七高弟の中より細川三齋より長命なりしかな
い茶道の宗匠は一人の様は猶じり大身の大名なれ
どもあつくそのを好むて茶道よふことあるやしく申出會
ひしるなり弟子も多かりし或時去る者も大名茶道を
好むる者も多かりし向後ハ中弟子より南を云ふ

世のためのおいしきばいなきを安んず事随分なり申べし
先師弟の約束も武士の茶湯は大事を以て侍一なり
間能く得心せしむて此上の茶湯を見よる自分
のもち前の家職を安んずて隱道塵外の者のおぬを
一碗の茶は没は味の深意を要し閑吟風雅を
のめり肝要の我武道は徳政なりしなり此今の世茶
道の流弊は近は此のいしきやこよなきを茶道を好
まざるに勿躰なき事なりしなり此三齋より古
以下もい蒲生氏郷とては身不肖なりしなり此三齋より自前
手如としておぬるなり先師一は自分この茶道を

要は日夜怠らず唯今頃の事の変事おうりても他は
おれず平時の用意なり一番は出陣して敵に敵万
騎ありとも我一子とて突崩えんと家中に武具を
を修練せむ人馬のやまわがばず武具馬具少くは鉄
不足なく心づけて好力は茶道の剛野幽雅をきめし
に遊ぶ事も武士の茶道の大事なり然るも今茶を
のむ方へ申すは行くは金夜もよらざる不意の突
あしけ怠らず速く取合せて面白くもてなり茶を
ふまわいしかきてもは掛りなき事とわたりやび
その其の備はるがごとく中十日廿日の用意

もろい出陣のならぬ不心掛なり其程大なる相違は
なきもいづ我お今年迄てやきおとろくは柄杓なる
その尋常よりいれども十五年の十月河内國片岡
の城より弟頼五郎十四茶をいれ足弟打はれ真先か
けそ攻入りける時信長はより感状しなり已來故
回つ體をいれ首より血よりなり事数を知ら
ず氏郷は又我おる及ぶべきよあしがる英雄ある
うなることあり程の大身なりいれぬ兩人あり茶
抄より大名よりありしよりいれぬ我茶業をよくし
かぎりて又上人の心より下子方人の心なりといふ

の考をこころづしよくはるべきを示すなり

江村專齋

附録

寛文の江村宗具（宗具）よりなり專齋先生と稱して
京師の人と父を既在（既在）として初歌連歌名あり
りそ吾道の達人あり宗具は儒学を以て名望あり
人より好む齡百歳を満るるを以て

後水尾天皇が在位の時召出されて修養の道を問
ひ給ひ黄金杖等を賜りける其九月に信
人信忠の巻に松茸數莖を生じて壽瑞をあら
わたり其年の元日よまわし和歌三首今世に
傳ふ此人信長公の時よりおろし百五十年かほりぬとの

茶壺
蓮華王

此に道哲親園浄坊取決りて代筆を拵て奉りし
時先人織部殿も居合せしり黄蓮五十枚と蓮華
王の茶壺一ツ拵来り壺はけ方より形程の由るり
園部親園行江にありしが丁酉の火より焼失
す

○日野肩衝は日野唯心大文字をより拵りし時
先人より拵りて茶入黄蓮五枚枚より壺を拵り来り
壺も少味ありて事あるに五十貫よりして四
拾五枚なりしは美作殿なりし中前より拵り
し壺也自ら自分より拵りてこゝにゆかりを拵りし

茶壺

代物神といひききりて因りて首尾を拵りて大文字を
拵りし壺なり

○小倉の色紙は元来伊勢の園司所持を厚紙一奴
に百枚押してありしは宗祇弟子宗長拵りしは
時一奴ともに園司ありし宗長拵りし一奴なり
め下隻を多く一隻の拵りしは火災より焼失し一隻送
りて拵りしは三十枚なりしは拵りしは
拵りしは八枚を律の歌を拵りしは拵りしは
○利休子道安茶の合を先人より拵りしは拵りしは
合す拵りしは拵りしは拵りしは拵りしは拵りしは

花
生
の
壺

と掛あめめらふしは事なりては今時道具を獲て
つゝの華美を争ふとよはしと格別なり其態
の二つへ入るや大かゝりては

○近衛の北山公の三藐院殿の文なり衰微の付
袴の二つ針を入るゆれ肩縮す袴は北山公の初
製之素袍の袖ととりてそよと襷を加へて
○雪踏いともありて皮とわするゆりか体より
るりと云々

○木綿踏履ハ今も製法の如くなると長岡山衛
の女もめて装す山麩茶の金と出さるる付也

雪踏

木綿踏履

とゆふてなむ

○茶の盆ハハケノ流とて何と是に上糸と改不
包とて茶盆といふものいかにけりて茶盆と出

まどめ袴と如夢観とて後よ改めてノ観とて
一溪故道三の姫晴るりの字人の字は偏なり
の及どぬといふ意とて利休よりかへ後あり

○香炉の茶會といふは何とて人病をなすはな
長盆の香炉と茶會と香筋とよめとて出す料理
ゆきりて付く水と出ると掛子といふ懐子を入ると
まをなすなりと付く香爐とありて香をゆめてた

如夢観ノ貫

香炉茶會

袖より懐よりこゝろをきかしてめて右の袖より巾あしたきごころ
を懐中して決の人ひとのしほはす決の家いへ又音ねの音ねを
銀盤ぎんぱんへつぎまいて左の袖より入いれて右に出いす初はつ客きやく
の品しなしきなまゝてききとびりてあはれ一ひと柱はしらと香かが
とあはれ上うへまゝすれは上うへのあはれ勝かち手てのあはれ目めとて人の
へあはれ入いれすあはれなるあはれかあはれ人ひとなるあはれは香か五ご片ぺん六ろく人にんなるあはれ
香か五ご片ぺん香か入いれるあはれなりあはれたあはれのあはれ方かた右みぎのあはれ心こゝろ
のあはれなりあはれ美み料りょう理り測そくのあはれ又またのあはれ法はふみんのあはれと思おもへあはれにあはれ勝かち手て
のあはれ信しん子しをあはれ細こめあはれてあはれ置おくあはれてあはれ何なににあはれああはれりあはれきあはれて
出いるあはれ香かがあはれすあはれるあはれをあはれ然しからあはれのあはれ心こゝろをあはれああはれけあはれしあはれ勝かち手て足あし直ちかまあはれは

信長寺古本

あり香かがあはれもあはれ必かならずずあはれ青あお磁じのあはれすあはれがあはれしあはれるあはれをあはれ向むかふあはれるあはれ何なににあはれずあはれ漸しぜん
戸かどのあはれ心こゝろをあはれきあはれくあはれるあはれことあはれ心こゝろのあはれああはれらあはれてあはれ茶ちや屋やのあはれ棚たなあ
らあはれてあはれ香かがあはれをあはれおあはれとあはれ香かとあはれしあはれくあはれ時ときをあはれ焼やくへあはれ茶ちや葉は物ものをあはれまあはれのあはれぬ
はあはれるあはれり

○伊豫いよの古ふる寺てらよりあはれ出いるあはれ唐たう山さん名な僧そうの詩し卷まき截せつ七しち幅はふと
世よ間ま方かたまあはれるあはれ心こゝろをあはれ脇わき坂さか屋やのあはれ幅はふ土つち井い屋やのあはれ幅はふ共どものあはれ
茂しげ古ふる林りんと妙たう道だうと西さい筆ひつのあはれ心こゝろをあはれ井い伊い屋やのあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ
定じやう門もんのあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ
心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ
○世上よ又また糸いと銀ぎん淨じやう山さんのあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ心こゝろをあはれまあはれるあはれ
五十五年ごじゅうごねん已おひ来きたるあはれり

芳古也
妙也
世石の
草踏

寛文のハラマフ

茶入
雲山

定家の
勅撰集

慶長の末作間浮閑が所持の雲山と云ふ茶入と人重
彦茶入百錠と云ふと或方より中納ありてその價を
あつんとしつゝ小折廿五金三十錠ありて七十錠不
足ありといふ今の世と甚だ相違す南都東大寺の奉
加^レ賴朝^ノ御金五十兩を宗進とんとりて其價も
之^ノ半^ニす^レ御金と云ふと云ふ事^ノ後^ノり^ニて
○立賣の所人所持する定家の筆の勅撰集を細
川幽齋法印求めりて其時價銀拾錠なり其時分
第一の買人あり今は鳥丸家とあると云ふ
○宗祇に今より百四五十年以前の人あり其時分の

成書

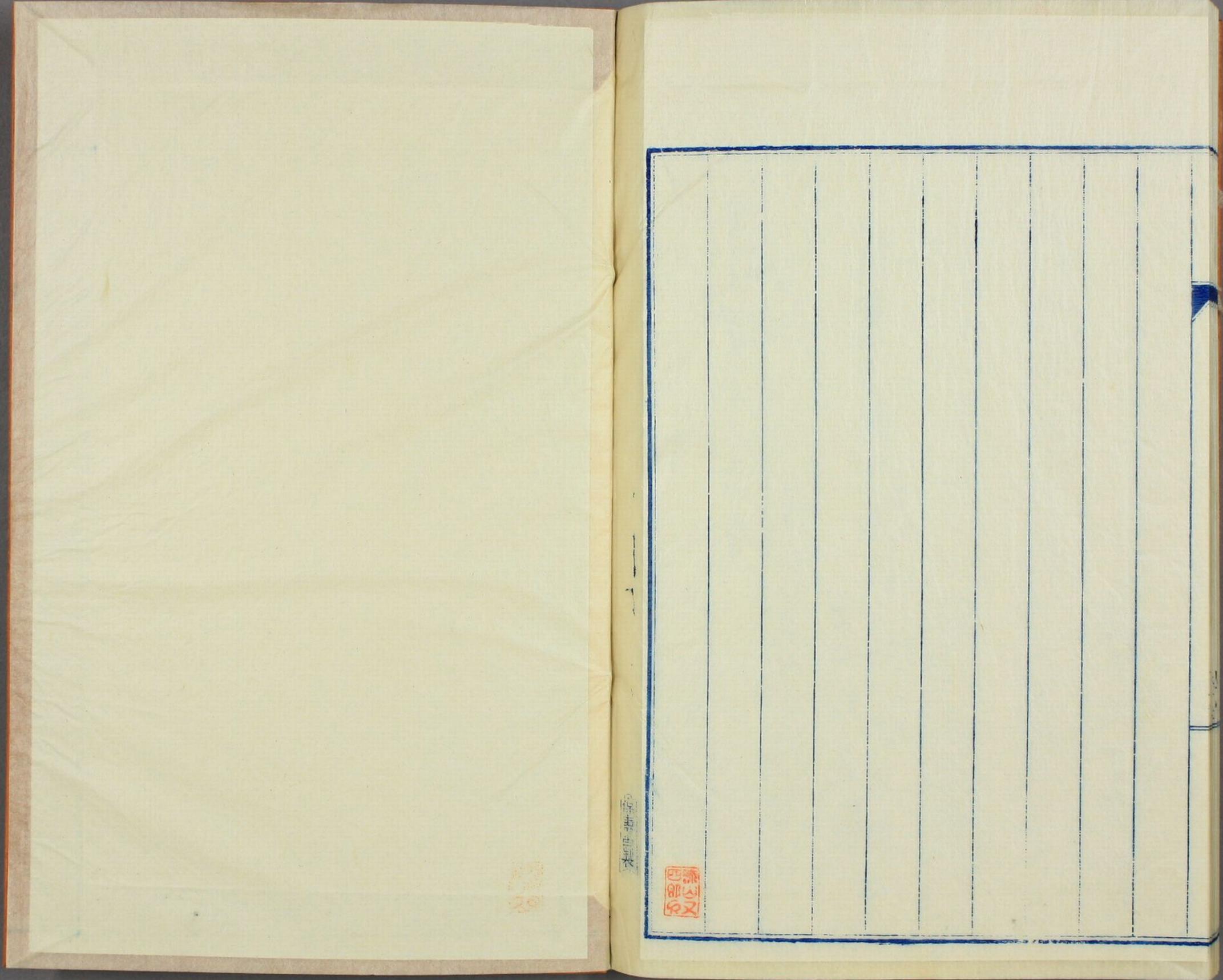
給仕などや^レもの^ノ成書といふ者あり老人其年歳
會を^レ事^ノは^レ連歌の式定よりて盛^ニなり^ニあり
宗祇^ノ已^ニ前^ニに百句満つ^レる^ニありて其言^ノ妙^ニなり^ニあり
ふ^レに^レ者^ノと^レ云^フ

連歌の次第

昌休 昌休 昌休 昌休 昌休
紹巴 紹巴 元紹 昌休 元的

五山大詩會
短冊切
詩會の式

○五山の^レ大詩會を短冊切と稱^スに南^ノ禪^ノ寺傳長^ノ花^ノ
時短冊切の會あり龍山賞^ノ度^ノと^レ云^フを^レ詩^ノを作^ル其
後隨^テて^レ會^ノの^レ式^ノ五山の長^ノ老^ノ及^テ西^ノ山^ノ會^ノ早^ノ朝
粥^ノを^レ供^スず^レ而^{シテ}其^ノ評^ノと^レい^フあり^ニ其^ノ人^ノ各^ノ其^ノ



紅印

卷之...

...

